

若手による研究会

(仮題) “我々は物性物理学の将来を如何に構築して行くべきか”開催の提案

京大基研 米 沢 富美子

九大 理 蔵 本 由 紀

今回の学園斗争を通じて、研究及びそれを担う主体のあり方が、学生によって、いわば外在的に批判の対象となったが、研究者として曲りなりにも一歩足を踏み込んでしまった我々が、もしこの批判をまともに受けとめるならば、自己が関わる研究を、たえず相対化して、人間及び社会との関連において、不断にその意味を問い返して行くことが要請される。それと同時に、我々が個々の研究に関わる姿勢そのもののの中に抜き難く巣喰っている、権威主義、プラグマティズム等が、仮借なき批判の対象とされなければならない。その意味で、我々は、困難な二重の課題を背負っている。我々がもし、これら諸々の“主義”との内面的格闘もなく、それらを身にまとったまま、外に向って、既存の研究体制の打破を叫び、革新的な言辞を吐いたとしても、単に見せかけの空語に終わらざるを得ないだろう。没主体的に個別専門領域に閉じこもり、人間にとっての、社会にとっての、その研究の意味を問わないことと、個別専門領域内における研究内容の不毛性とは、同一の精神構造に由来していると我々は考える。

さて、物性物理学に話を限れば、この分野の物理学の、学問としての運命(?)は久しく多くの研究者の話題にされて来た。「物性論は曲り角に来了」というのから、「物性論にはもう夢がない」、「物性はもう終わった」という悲観的な見方に至るまで、様々であるが、物性物理学というこの分野が、何らかの意味で行きづまりに來ているのは確かなようだ。

今日、学問の細分化、専門化及びそれに伴う全体的な展望の喪失は、多くの分野で深刻な問題として取り上げられているが、物性物理学に於ては、他の、例えば素粒子論研究と比較しても、その深刻さの程度はより切実であるように思われる。素粒子論の場合のように、ある限られた対象に対する方法論が、積んでは崩され積んでは崩されしている分野では、若手の研究者もある時期ある

形で先達と同一のスタート・ラインに立つことも可能である。一方、物性物理学は、その学問的特質を考えてみると、そもそもの発端から細分化の宿命を担っており、科学の急速な発展と膨大な情報量とが、より一層の細分化、専門化を促進している。従って、経験的要素が強く要請され、広い視野である程度の見通しを立てられるようになるまでに修得すべき知識の量が多く、一人前の自立した研究者と自認できるまでにはかなりの期間を要する。しかも、その間仮借なき業績主義の波にたえず洗われていなければならないのである。その様な中であっては、期待と不安とを抱き乍ら未知の世界を自ら摸索し、自らの手で何かを勝ちとろうとする、冒険心や思い切った試みは、すでに若い時期から徐々に侵され、不毛化して行く。

結果の保証されていないいちかばちかの賭にいどむよりは、壮大なことは出来なくても、保証された道を大禍なく歩む方が賢明だという年寄りじみた発想が出て来たりする。情報の山を器用にこなし、書いても書かなくても良いような論文を乱造し、それで結構“一人前”と認められ、名譽心はある程度満足させられ、自らも何かをやったような気になってしまう。そこには、我々が真に生きているという確かな証もなく、安泰で平穩で、一度はまり込んだら容易には抜け出せない居心地の良さがあるばかりだ。学問に対するこの様な姿勢が、大学問題、研究体制の問題、さらには社会的人間として必然的に関わらざるをえない政治問題にも無関心で無気力な小市民的意識構造を生み出して行く。しかし、その様なところから、どうして人間らしい学問の生まれるはずがあらうか？ 我々はかつて、目を輝かせ、血をわかせて物理に接したことが何度あったであらうか？ しかも、学問に埋没することなく、それを不断に対象化して社会につながっている自分を実感として感じた経験がこれまでどれ程あるであらうか？

学問の真の姿を失わしめたものとして、我々はこれまでもっぱらその外的要因を、例えば研究体制云々というような形で追求して来た。外的要因の根源をさぐり、それを排除すべく努力することは、必要不可欠である。しかし、それだけでは決定的に欠けているものがある。我々の内なるものとの闘いこそ、より重要でより熾烈であることを知らねばならない。我々の心のどこかに、不安定な保証されない未来を恐れ、何らかの形の約束手形を確保しておきたくて、

研究会提案

既成の学問体系や、研究者集団の中のシステム（講座制あるいはそう呼ばれていなくても本質的にはこれと大同小異のもの）や、特殊利害にもとづいた人間関係に依存したいという気持ちが知らず知らずのうちに巣喰っていたとしたら、それとの闘いを経ないで、真の学問を我々の手に奪還することは不可能である。易きにつきたい心がある限り、如何に変革と叫んでみても、その言葉は何の重みも持ち得ない。我々をとりまき、我々を身動きできなくしている無数のエスタブリッシュメントに懐疑の目を向けることから一切ははじまる。既存の学問的・人間的従属を断ち切り、全くの裸のひとりひとりに立ち戻った地点から、初めて新たな可能性への道がさがし出せるのである。勿論、それはこの上もなく勇気の要ることである。なぜなら、そこには何ひとつとして保証されているものはないからである。それは困難至極なことである。なぜなら、そこにはひとりの案内人もいないからである。

しかし、我々はしかれたルールの上を、約束された目標に向って、型通りに歩いて行くような生き方を拒否するとともに、従属をたち切り孤立化を徹底させる過程で、孤立した者同志の内的な連帯を追求したい。

この様な立場から物性物理学の現状を見直し、その将来への方向を見出すべく、裸のひとりひとりが、あくまでも相互のもたれ合いを拒否しつつ集って、議論する機会をもちたいと思う。

これが、我々がここに“若手による研究会”の開催を提案するゆえんである。勿論、ここで若手というのは、年令的な意味ではなく、上記の我々の意気込みに同調していただける若い精神を持ち合わせた方という意味である。

具体的には、45年度前期の基研の研究計画に、短期研究会として応募し、一方「物性研究」からも何らかの形の後援を得たいと考えている。運営その他に関して、提案者の側でも腹案はあるが、新しい試みとして、研究計画に応募する前に、上記の原則に基本的に御参同いただける同志をつのり、運営方針等も公募したいと思う。

我々の提案に対する御意見、御批判及び研究会の具体的な運営に関する御提案等を、提案者宛あるいは「物性研究」編集部宛に御送り下さるようお願いいたします。（締切45年1月16日必着のこと。）